

トゥデーラのベンジャミンの旅書簡（3）

—ダマスカスからバグダードまで—

関 根 謙 司*

Abstract

Benjamin of Tudela, a medieval Sephardic merchant, traveled all over the Mediterranean world, including both Christian and Moslem areas. The twelfth century of his lifetime was not only a magnificent time when international commerce developed but also an intolerant time which did not permit other religions. Especially in the Christian European world, the Crusades were organized against the Islamic world, the cathars, and also the Jews. Proceeding the Reconquista in Christian Spain, Benjamin, born in Tudela after the success of the Reconquista of Navarra, visited many Jewish communities from 1159 or 1160 to 1173.

He wrote many documents in Hebrew about many Jewish communities in the towns and cities where he stayed. He wrote from Barcelona, Narbonne, Lunel, Marseille, Pisa, Lucca, Roma, Salerno, Taranto, Orije, Otranta, Thebes, Salunki, Cyprus, Antioch, Beirut, Tyre, Haifa, Nablus, Jerusalem, Askalon, Tiberias, Damascus, Aleppo, Baghdad, Sura, Pumbeditha, Khuzestan, EL-Cathif, Cairo, Gizeh, Alexandria, Messina, Palermo and Tudela. His documents changed a famous travel book titled *Sefer ha-Massa'ot*.

In this article, I have translated and summarized his travel book into Japanese from Hebrew. I have tried to approach his living time, and to realize checking from other historical documents and studies. In this study, I discussed Syria and Mesopotamia under Islamic rules, and will deal with other Islamic areas such as Arabian Peninsular and Egypt in the next article (part 4).

Key Words : Benjamin of Tudela, Medieval, Sephard, Sefer ha-Massa'ot, Hebrew, Islam, Syria, Mesopotamia, Damascus, Aleppo, Palmyra

Documental letters of Benjamin of Tudela (3)—From Damascus to Baghdad—

*Kenji Sekine

Correspondence Address : Faculty of Business Administration, Bunkyo Gakuin
University, 1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama
356-8533, Japan.

Accepted November 5, 2002.

Published December 20, 2002.

6. ダマスカス滞在

人生は人により波乱に富んだ一生もあるが、平坦な場合もある。しかし、それ以上に時代は平穏な生活から人生を奪う場合がある。ユダヤの旅行家のトゥデーラのベンジャミンの場合は波乱の人生が時代によってより波乱に満ちたものになったといえるのかもしれない。第1回十字軍によるエルサレム奪回とそれに続くラテン王国の建国後にパレスチナからシリアに入った意図は依然として不明ではある。しかし、イスラム教徒にもキリスト教徒にも一定の距離を置いていたからできたというには、余りにも危険な旅である。ダマスカスは後の第3回十字軍に見られるように、イスラム教徒側の拠点であり、ザンギー朝のアターベクであったヌールッディーンの躍進が著しい時代であったことをベンジャミンは伝えている。ヌールッディーンはサラーフッディーン (サラディン) の叔父が司令官として仕えていたアターベクである。サラーフッディーンの父もベアルベックの司令官になっている。ベンジャミンの記録は、中世イスラム世界に生きたユダヤ教徒の生活のみならず、ユダヤ教徒から見たイスラム教徒の日常生活を垣間見せてくれる。⁽²⁾

(パニアスから) 2日かけて、ダマスカスまで着いた。ダマスカスは大都市であり、トルコ人たちがトガリミーム王国と呼ぶヌールッディーンの支配が始まったところでもある。⁽³⁾
[lāmed]

アターベクは1118年に生まれ、1174年に亡くなっているため、晩年はちょうどベンジャミンがダマスカスを訪れた時期と一致する。1144年、エデッサで十字軍を襲撃し、1154年にはダマスカスをファーティマ朝の支配下から解放している。ファーティマ朝がサラーフッディーンに滅ぼされるのは1171年であり、サラーフッディーンがエジプトならびにシリアの総督に任命されるのが1169年、1174年にダマスカスを征服している。ベンジャミンのダマスカス滞在は1173年ごろと思われるので、ちょうどサラーフッディーンが来訪する直前であったわけである。現在ダマスカスのウマイヤ・モスクにはサラーフッディーンの墓があり、いまなお訪れる人が絶えない。古今を通じて、もっとも民衆に愛されたサラーフッディーンをベンジャミンが記録していないのは、ちょっと残念ではある。

(ダマスカスは) 美しい、大きな町で、城壁に囲まれている。庭園や果樹園の地だ。両側 (の長さ) が15ミッリームに及ぶ。アマナ川やパルパル川の源となっているヘルモン山があり、町はヘルモン山の麓にある。[lāmed]

ダマスカスは多くのイスラム教徒、アラブ人たちの郷愁を誘ってきただけではない。バビロニア・タルムードでも「エデンの園の入り口」として描かれている。⁽⁴⁾パレスチナから逃れてき

たユダヤ教徒を多く受け入れたダマスカスは、当時、全ヨーロッパよりも多くのユダヤ教徒が住んでいたと想像されている。ダマスカスにあった果樹園は、プラム、ざくろ、いちじく、アンズであったと思われる。⁽⁵⁾ダマスカスのプラムとセニールのワインはエルサレムのタルムードの時代から知られたもので、果樹園で作られる果物は乾燥して保存食にできることも特色だ。いまでもイスラム圏の市場にいくと、これらのドライ・フルーツに出会う。

アマナ川は町の中央を流れ、有力者の家々に水を供給するだけではなく、公共の場や市場にも水を運んでいる。バルバル川は庭園と果樹園に注ぎ込む。ダマスカスのどの国の人にとっても交易の中心地だ。当地にはジャマア・ダマスクと呼ばれるイシュマエル人たちのモスクがある。どこの国にもないほど（すばらしい）建物だ。（そのモスクは）イブン・ハッダードの宮殿だったという。〔lāmed〕

旧約聖書によると、モーゼの子アブラハム（アラビア語名ではイブラーヒーム）は難産の末、イシュマエル（アラビア語名ではイスマーイール）を生んだ。成人したイシュマエルは家族と別れ一人、伝道の旅に出かけた。アラビア半島に伝わる伝説では、⁽⁷⁾アブラハムの子イシュマエルはアラビア半島の各地を訪れ、メッカにも来訪したという伝説がある。アラビア半島の遊牧民、つまりアラブ人はイシュマエルが各地に残した子孫だという、いわゆるアブラハム伝説があり、アブラハムこと自分たちの先祖であると信じてきた。ユダヤ教徒のベンジャミンもアブラハム伝説に沿って、アラブ半島の遊牧民のことをイシュマエル人と呼んだのである。

ベンジャミンが当時のダマスカスの繁栄ぶりを伝えているのは興味深い。ラテン王国の十字軍の騎士たちは1144年クラク・デ・シュヴァリエ城（Crac des Chevaliers）をダマスカスから100キロほど離れたところに建設し、トリポリ伯レイモンの支配下の居城とした。ダマスカスからなお遠く離れており、イスラム支配下にあったとはいえ、ベンジャミンの記述から推定できることは、聖戦（al-jihad）で分裂から統一に結束しつつあったイスラム世界に対してダマスカスの住民も安堵していたともいえるが、したたかな住民が戦時での生きる術に秀でていたともいえる。第2回十字軍がキリスト教徒同士で内紛と抗争を繰り返していた時期であり、戦場は聖地を抱くパレスチナであったことも影響している。⁽⁸⁾ベンジャミンのシリアの記録は、パレスチナと異なり、十字軍の脅威を感じさせるものは不思議と皆無である。ビザンチンの建築家によるダマスカスのモスク、すなわちウマイヤ・モスクの壮麗さにはいたく感激したようだ。ダマスカスの職人芸にもびっくりしたらしく、ガラス細工の壁面や日時計について記録している。

（中略）宮殿には金銀で飾られた部屋がある。壁面はガラスで細工されている。人々がそのまわりに来ると、目の前を通り過ぎる他の人を見ることができ、横切れれば鏡のようになる。壁の内側の人と外側の人は隔てられているけれども。そこには金銀で飾られた柱も

あり、またあらゆる色を使った大理石の柱もある。[lāmed-alef]

ベンジャミンがダマスカスのユダヤ社会についても記録しているのは、他の町の記録と同様である。

(中略) ダマスカスには3千人ほどのユダヤ教徒がいる。彼らのなかには知識豊かで、金持ちのユダヤ教徒もいる。イスラエルの地のイエシュヴァの校長もダマスカスに住んでいる。ラビ・アザリーアもその人で、ラビの兄弟たちも同居していた。サル・シャロームがベート・ディーンの長をしている。ラビ・ヨセフはイシュヴァで5席目の責任者だ。ラビ・マツリアフは説教師であり、統括管長である。ラビ・メイルは賢者だ。ラビ・ヨセフ・ベン・アル・ピラートはイエシュヴァの館長であり、ラビ・ヒーマンは会計責任者だ。ラビ・ザドキアは科学者だ。(ダマスカスには)100人ほどのカライ派が、400人ほどのクタイ派(のユダヤ教信者)がいる。お互いに平和に生活しているが、相互に婚姻関係を結ぶことはない。[lāmed-alef]

ダマスカスのユダヤ教徒の実数は分からない。レーゲンスブルクのペタヒアは1万人としており、⁽⁹⁾1175年にドイツを出発したことを考慮しても余りにもかけ離れた数値だからである。しかし、いずれにしても、大規模なユダヤ社会があったことをベンジャミンは伝えている。イエシュヴァとはユダヤ社会を指導するユダヤの高等研究院で、ラビ養成学校の役割も果たすとともに、ユダヤ社会の問題に対して統一した見解を示す機関でもあった。ダマスカスにイスラエルの地にあるはずのイエシュヴァがあったことは、十字軍の侵攻を逃れてきたとも考えられるし、別の理由があったかもしれない。ベンジャミンのダマスカス滞在は決して長期に渡ったものではなかったと思われる。コンスタンティノープルに比べると、いたって簡単な記述である。

7. バアルベックとその周辺

ガライドまでは一日の行程だ。60人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・ツアドク、ラビ・イエツハク、ラビ・サラモンだ。大きな町で川が注いでいる。広範囲にわたって堰き止めや庭園ならびにブドウ園がある。そこからサルカトまでは半日だ。さらに半日でバアルベックに着く。バアルベックはレバノン溪谷にあり、サラマ【訳注＝ソロモンのこと】がファラオの娘のために建設したものである。宮殿は大きな石で建てられていた。1つの石の長さは20キュービットあり、幅は12キュービットである。それぞれの石の間には何も無い。この建物はアスモダイ王によって建てられたという話だ。町に入ると、

中心部に大きな泉が流れていて、川のような。水車や庭園，果樹園もある。〔lāmed-alef〕

博識なベンジャミンだが、なぜかバアルベックの神話については触れていない。豊穡と再生のバビロニアとフェニキアの神話には無関心だったのか、あるいは知識がなかったのか、それは知るすべもない。シリアに来てからは、どちらかというとな農業用の灌漑設備などにより関心が高くなったようだ。

タドムール【訳注＝パルミラのこと。なお、アラビア語では現在も Tadmūr という】は砂漠の中にあり、サラマ【訳注＝ソロモンのこと】が建設したものである。大きな石があるのはこの種の町と同様だ。タドムールは砂漠の中に城壁を囲み、あらゆる住民から隔離されている。バアルベックからタドムールまでは4日の行程だ。（タドムールには）2千人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。彼らは勇敢な戦士で、キリスト教徒やヌールッディーン王の支配下にある遊牧民と戦う。彼らはイスマール派とは友好関係にある。（ユダヤの）指導者はギリシャ出身のラビ・イツハク、懐かしいラビ・ウジアルの息子のラビ・ナタンである。〔lāmed-bet〕

十字軍の直接の原因がキリスト教徒の聖地巡礼に対して、イスラム教徒が妨害したことだとされている。1095年のクレルモン⁽⁹⁾の宗教会議ではまず第一に「聖地奪還」を謳っている。もちろん、それとともに「飢えと寒さのヨーロッパとの決別」があったことが事実であるが、聖地でイスラム教徒を迫害したのは従来、セルジューク朝のように語られてきた。しかし、当時、聖地を支配していたのはファーティマ朝である。聖地奪還というのが本来の動機でなかったことはビザンチン皇帝アレックス1世がセルジューク朝に対する援軍をローマ教皇ウルバヌス2世に求めたことからも理解できる。⁽¹⁰⁾ ファーティマ朝はシーア派の7イマーム派を主張し、スンナ派と激しく対立していた。ファーティマ朝の狂信的なカリフとして名高いアル＝ハーキムはユダヤ教徒を殺戮したことで知られるが、タドムールでは敵対関係はなかったことを伝えている。なお、ベンジャミンの来訪前に第2回十字軍はダマスカスを目指して進軍しながらも、イスラム軍に阻止されている。

バアルベックからキルヤティーンまでは半日の行程だ。染色業のユダヤ教徒が一人だけ住んでいる。そこからハマツァンまで1日の行程だ。ソマリア人の町には20人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。〔lāmed-bet〕

この記述から、バアルベックからタドムールとキルヤティーンに向かったことが分かる。つまり、ベンジャミンの旅はときおり周辺の町を行き来していたことが想像される。ユダヤ教徒

の旅にとって、昔から今日まで最大の問題は宿泊場所ではなく、安全な食事である。kawsher (イーディシュ語でいう Koscher) が提供されるには、ユダヤ教徒の協力が不可欠であり、まただからこそ遠方のユダヤ教徒を迎い入れる各地のユダヤ社会のコミュニティがあったわけである。何日も野宿しながら旅をする場合の食料は豆であると想像できるが、金曜日の日没から土曜日の日没にかけての安息日 (shabat) はマッツォと呼ばれるイースト抜きのパンが必要である。12世紀から始まる地中海世界の商業の躍進は交易のための旅を重ねる商人の活躍が大きく関係している。キリスト教徒やイスラム教徒の商人たちは広大な政治的なテリトリーがあり、自分たちがキリスト教圏、イスラム教圏のテリトリー内で旅する場合の不便はほとんどなかった。各地の情報や情勢に飢えていたキリスト教圏の人々は旅人の商人を泊めることも少なくなく、温かい食事が提供された。一方、もともと商人の活躍があったイスラム圏ではムスリムの商人も旅するにあたり大きな不便はなかった。両者に共通していることは、相互の交流はあまり見られず、あってもいくつかの大きな都市にあったコロニーの存在が必要だったことである。また、メッカへの巡礼の道、サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼の道が各地をつないだことが交易に大きく貢献している。巡礼は宗教の面から確信と動機を与え、経済の面から勇気と行動を与えたのである。⁽¹¹⁾ それに対し、ユダヤ教徒の旅は安易ではない。頼りになるのは各地に離散して住んでいるユダヤ教徒だけであるが、しかし近隣の情報は各地にあるユダヤ社会から入手する必要がある。その場合、ラビとの交流は欠かせない。ラビはユダヤ社会の宗教の指導者ではあるが、宗教的活動や行事からは収益を得てはいけなさとされてきた。ラビの収入源は日常的には kawsher の食肉や食器類・調理器具類を検査することに依存している。また、ユダヤ教徒同士の結婚相談も収入になる場合が少なくなかった。ラビになるためにはミドラシュやイエシュヴァでの学問的研鑽が必要であり、同窓生たちは各地のラビに迎えられる。キリスト教と違い、ラビは婚姻が認められており、ラビの娘は青年ラビと結婚することも多かった。ラビはまた一般のユダヤ教徒のお見合いから結婚を委託されることが多かった。遠方からやってきたユダヤ教徒の娘は初めて会う見合いの相手と数時間後には結婚することも稀ではなかった。ラビは何よりも各地のラビと大きなネットワークを結んでいた。10世紀以前は gaon と呼ばれたスーラやブンバティアのイエシュヴァの校長が絶大な権力を持ち、各地のユダヤ社会の疑問に答えていたが、10世紀以降は各地の大きなユダヤ社会のコミュニティの代表者 (nasi) がこれに代わった。

ベンジャミンの記述からはバアルベックにはユダヤ教徒がいないかのように描かれている。しかし、当初からユダヤ教徒のいない町をわざわざ出向くことはなかったと思われる。十字軍とイスラム軍が激しく戦っていた地域の町から逃れるユダヤ教徒も少なくなく、⁽¹²⁾ ベンジャミンはその確認の必要性があったと想定できなくもない。ラビの息子として生まれ、自らは商人といわれ、各地のユダヤ社会を調査していた。この事実から単なる商人ではなく、ラビの要求に応える仕事を一任されていた可能性も否定できない。宝石商とも言われるのは、小さな商品ながら大きな商品価値があり、また不自然ではない商人の姿であったのであろう。それにしては、

ユダヤ社会の記述は決して多くはない。戦争の時代は商人の時代という認識が古来よりユダヤ社会にはあった。ユダヤ社会としては戦争に組するわけではないが、戦争を利用して富を得るのは、Roschild 家を引用するまでもなく、ユダヤ教徒の認識として特徴づけられる。そう考えてくると、わざわざ十字軍の時代だからこそ近東に赴いていたと考えられてくる。ベンジャミンがユダヤの商人の活躍の原動力となった情報提供者だったと断定はできないが、少なくともその必要性が生じ始めた時代に旅をしていることは事実である。

8. アレッポからメソポタミアへ

(ハマツァンから) ハマまで1日の行程だ。(ハマは) はレバノン山系の麓を流れるヨコブ川【訳注=オロント川のこと】沿いにある。少し前に大地震があって、一日で1万5千人が亡くなった。(ハマには) 200人のユダヤ教徒がいたが、いまは60人ほどでユダヤ教徒の指導者はラビ・エリ・ハコヘン、アル・シーフ・アブ・ガラブ、それとムフタールだ。そこから半日でシャイザルことハツォールに着く。そこからラドミンまでは3パラサングだ。そこからハラブ【訳注=アレッポのこと】までは2日の行程だ。(ハラブは) かつてアラム・ツォヴァと呼ばれたところで、ヌールッディーン王が住んでいるところだ。泉も川もないので、雨水を飲み水にしている。どの家にもゴーブと呼ばれる井戸がある。(ハラブには) 5千人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・モシェ・アル・コスタンティヌとラビ・シェットだ。[lāmed-bet]

ダマスカスのライバルとしてイスラム世界の栄華をもたらしたアレッポの記述は意外にあっさりしている。シリアの滞在が短かったことを示唆しているのかもしれないが、どうもベンジャミンにはシリアは余り馴染めない町が少なくなかったのかもしれない。もともと、一部の町を除いて、シリアの経済は農業によって支えられており、商人の目からは余り魅力的ではなかったともいえる。それにしても、ダマスカスといい、アレッポといい、余りにもあっけないほどの記載しか見受けられない。ユダヤの学問の中心地であったメソポタミアと比べ、余りにも魅力ない町ばかりであったのだろう。

ベンジャミンの行程は、今では余り考えられない道順になっていることに驚く。地中海側を南下し、聖地を経て北上していることから窺える。現在でもアンタキアとアレッポはトルコとの国境を越えて一直線である。なぜそうしなかったかは、十字軍が支配するラテン王国の3公国であるアンタキア公国、トリポリ伯領、エルサレム王国を抜けて、イスラム支配地区に入ったからであることは容易に推定できる。支配地域を通り過ぎるときの記載がないのが残念なくらいだ。

バリツまでは2日の行程だ。(バリツは)ペトラとも呼ばれ、ユーフラテス川沿いにある。バラアムの塔はいまもある。(バリツには)十数人のユダヤ教徒が住んでいる。そこから半日でカラアト・ガバルに着く。そこはセラア・マドバラともよばれているところで、アラブ遊牧民の支配下にあるところだ。〔lamed-alef〕

ユーフラテス川が見えると、メソポタミアもすぐそばだ。バビロン捕囚以来、メソポタミアはユダヤ教徒に特異な感慨を与えてきた。バビロニア・タルムードが編纂され、ガオンの時代にはスーラとペンバティテこそがユダヤの知恵と知識の地であった。アンダルシアのユダヤ社会もアブドル＝ラフマーン3世によって禁じられるまで、メソポタミアの2都市に定期的に献金していた。最高水準のユダヤ学を習得しようとする青年たちはこの地を学習の地を選ぶことを希望した。

(中略)そこから一日でラキアに着く。そこはかつてトガルミームと国境をわけたシリアル王国の地のサルハともいう。そこには700人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(ユダヤ社会の)指導者はラビ・ザカイと盲目のラビ・ナディーヴ、それにラビ・ヨセフである。そこにはバベルからエルサレムに戻ったエズラ時代のユダヤ教会が残っている。

そこから旧都のハランまでは2日の行程だ。そこには20人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。(ハランは)テラとその息子アブラムの家があった場所だが、いまはその家はない。イスマール派の人々がこの場所を讃え、祈りにやってくる。

そこから2日でラアス・アル・アインだ。そこはアル・ハビール川があり、水源となっている。(川は)メダイを横切り、ゴザン川に注ぐ。そこには200人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。ナツビーンまではそこから2日の行程だ。水の豊かな川に沿った大きな町で、千人ほどのユダヤ教徒が住んでいる。そこから2日でゲジラ・イブン・ウマルだ。ヒデケル川【訳注＝チグリス川のこと】の中州にあり、4千ミッリームの高さを誇るアララット山の麓にある。(アララット山は)ノアの箱舟が辿り着いたところだ。だが、ウマル・ベン・アル・ヒサブ【訳注＝第2代カリフのウマル・イブン・アル＝ハッターブのこと】が2つの山の頂上にあった箱舟を見つけ出し、イシュマエル人【訳注＝アラブ系イスラム教徒のこと】の礼拝堂【訳注＝モスクのこと】を建設した。箱舟の隣にはエズラのユダヤ礼拝堂【訳注＝シナゴグのこと】がいまもあり、アブ月の9日【訳注＝エルサレムの第二神殿が破壊された日】にはユダヤ教徒がここに祈りにやってくる。ゲジラ・イブン・ウマルには4千人のユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・ムフタル、ラビ・ヨセフ、ラビ・ヒーアである。〔lamed-gamel〕

ローマ時代のユダヤの歴史家ヨセフスは当時、ノアの箱舟があったと記録している。ベンジャミンよりも20年遅れてアルメニアを訪れたレーゲンスブルクのラビ・ペタヒアは箱舟があり、

⁽¹³⁾固定されていたと書いている。もちろん、これがラビ・ペタヒアが直接、見たわけではないだろう。問題は、当時のユダヤ教徒の間ではノアの箱舟が実在していたという話が伝わっていたことである。さらにいえば、ノアの箱舟伝説がユダヤ社会に流布している背景に、不透明な混乱の時代を予期させるものがある。メシアの到来を信じてきたユダヤ教徒にとって、キリスト教世界とイスラム世界の戦争はある種の終末を意味していたともいえる。それとともに、いまも多くの冒険家たちを躍起にさせるノアの箱舟が当時あったかもしれないという噂があればこそ、箱舟探しの夢は絶えないのだろう。

9. モスルからバグダードへ

そこからラムーツェル【訳注＝モスルのこと】までは2日の行程だ。そこは大アシヨールとも呼ばれているところで、7千人のユダヤ教徒が住んでいる。指導者の1人のラビ・ザカイでダビデ王の血筋を引く人物だ。ラビ・ヨセフはバルハーン・アル＝マレクとも呼ばれ、ダマスカス公国のヌールッディーン王の兄弟のズィーンディーン王の占星術師をしている。(モスルは)ペルシャ王国と境を接した町だ。大きな町で、古くからあり、ヒデケル川【訳注＝チグリリス川のこと】に面している。橋を渡ればニネヴェにいけない。(ニネヴェは)破壊されたが、村や集落がいくつかある。ニネヴェは城壁に囲まれていて、(ニネヴェから)アル＝バアル【訳注＝アルベラのこと】の町までは40パラサングだ。ニネヴェはヒデケル川沿いにある。アシュールの町はヨナが建設したオバディアのユダヤ教会とアルコシのナフームのユダヤ教会がある。[lāmed-dālet]

古代アッシリアの首都でもあったニネヴェは旧約聖書の民には独特な思いがある。シリアの記述に比べ、メソポタミアの言及が多いのは、滞在が長期に渡ったというよりも、バビロン捕囚以来の思いが強く関与していたと考えるべきであろう。ユダヤ教徒のある種の特異性は歴史、しかも3千年にわたる歴史を自分が体験した過去のように感受することといえる場合が少なくない。その意味で、歴史妄想狂に思われる行動をしばしば繰り返してきた。メソポタミアに来てから、ベンジャミンもあたかもそれにとりつかれたようだ。モスルのこともわざわざアシュールという古称で呼んでいる。

そこから、ラフバまでは3日かかる。(ラフバは)ユーフラテス川沿いにあり、2千人のユダヤ教徒がいる。指導者はラビ・ハズキア、ラビ・タフル、ラビ・イツハクだ。(ラフバは)庭園や果樹園で飾られた、すばらしい、大きな、美しい、城壁の町だ。そこからカルケシアまでは1日の行程だ。カルカシーシュとも呼ばれた、ユーフラテス川に面した町だ。500人のユダヤ教徒が住み、ラビ・イツハク、ラビ・エルハナンが指導者だ。

そこから2日でエル・アンバルに着く。かつてブンデディタと呼ばれたところで、ネハルディア地方にある。およそ3千人のユダヤ教徒が住み、ユダヤの賢者が何人もいる。ラビ・ラビ・ハンがラビ長で、ラビ・モシエとラビ・エフヤキムが指導者だ。ラビ・イエフダとラビ・サムエルの墓があり、2人の墓の前には生前に建てられたユダヤ教会がある。バビロン捕囚のときのナシ【訳注=ユダヤの長】であったブステナイやラビ・ナタン、ラビ・ナフマン・バル・ババの墓もある。そこからハドラまでは5日の行程だ。1万5千人のユダヤ教徒が住んでいる。指導者はラビ・ザケンとラビ・ヨセフとラビ・ナタナエルだ。
[lāmed-dālet]

スーラとならび、10世紀以前のガオンの時代を現出させたブンバディテの記述はいたって簡単である。ラビ長がいることを記しているが、当時はかなり衰退していたことを示唆するのか想像の域を出ない。

そこからオクベラまでは2日かかる。ユダヤ王のイェクニア王によって建設された町で、1万人のユダヤ教徒がおり、ラビ・ハナン、ラビ・ヤビーン、ラビ・イシュマエルが(ユダヤの)指導者だ。[lāmed-he]

バグダードまであと2日。ベンジャミンの足跡はユーフラテス川沿いを歩いていることを実証してくれる。パレスチナに比べ、メソポタミアのユダヤ社会の人口は多い。モンゴル軍の到来はまだ半世紀先であり、十字軍の侵攻もなく、ユダヤ教徒の商業活動を保証する平和がメソポタミアにあったことを示唆してくれる。バグダードの記述は詳細を極める。(次回に続く)

(注)

- (1) cf. Norman A. Stillman, *The Jews of Arab Lands-A History and Source Book* (Philadelphia, 1979), pp. 252-4
- (2) Baghdad の記述はよい例である。(Part 4に紹介予定)
- (3) Part 1 と Part 2 同様、翻訳にあたっては、Marcus Nathan Adler, *The Itinerary of Benjamin of Tudela* (Frankfurt am Main, 1995)のヘブライ語の校訂本に依っている。本来ならばヘブライ語原文も併記すべきであるが、文字作成を筆者みずからが余儀なくされるというだけではなく、写本からの校訂研究をめざしたものではないという認識から翻訳のみとした。本研究はあくまでベンジャミンの記録の旅書簡と扱い、その explication de texts (Leo Spitzter の言葉を借りれば Interpretation)をめざしたものである。
- (4) *Babylonia Talmud*, Eruvin, 19a
- (5) cf. Sandra Benjamin, *The World of Benjamin of Tudela* (Cranbury/London, 1995), p. 205
- (6) *Genesis* 25-12
- (7) Abū al-Faraj al-Isbāhanī *Kitāb al-Aghānī*, XIII, pp. 85-88, Jacques Berque, *Musique sur le fleuve* (Paris, 1988), pp. 58-60
- (8) ベンジャミン時代の十字軍支配地区とイスラム支配地区については, Jonathan Riley-Smith,

Atlas des croisades (Paris, 1996), p. 53 に依る。

- (9) のちに引用するように、ベンジャミンはその数を3000人とあげているが、同時代のユダヤの旅行家のレーゲンスブルクのペタヒア (Petahia von Regensburg, 1175-1185) はその数を1万人としているという。*Encyclopedia of Judaica*, Jerusalem, 1972, vol. 5, p. 1242
- (10) Jonathan Riley-Smith, *op.cit.*, p. 21
- (11) Tudela を発ったベンジャミンのルートが必ずしもキリスト教徒のルートを採用したことではないことは、Jaca を抜けていないことから明らかである。ユダヤ社会を結びつけるルートは別にあったと考えるべきであろう。
- (12) 十字軍がエルサレムを陥落させたとき、イスラム教徒だけではなく、ユダヤ教徒を虐殺したことは有名である。
- (13) *The Itinerary of Benjamin de Tudela*, Malibu, 1983, 1993, p. 94